

4 京田辺市宮ノ口古墳群の再検討

岡田大雄・池田野々花

1. はじめに

宮ノ口古墳群は京田辺市南部に所在する古墳時代後期の古墳群である。このうち2・4号墳は1994・1995年に田辺町教育委員会によって発掘調査がなされた。調査の概要はすでに報告されているが（田辺町教育委員会1995・1996）、2号墳の出土遺物を中心に未報告の資料が確認されたため、京田辺市史編さん事業の一環として宮ノ口古墳群関連資料の調査を実施した。本稿は、その成果を報告し、宮ノ口古墳群について再検討をおこなうものである。

なお、調査は菱田哲郎・諫早直人の指導のもと、岡田大雄（博士前期課程）・池田野々花（4回生）・守田悠（3回生）がおこなった。石材の調査は橋本清一氏（京都府立大学非常勤講師、元京都府立山城郷土資料館）と共同で実施した。また本稿をなすにあたって、発掘調査当時の旧田辺町教育委員会社会教育課職員であった鷹野一太郎氏にご教示を得た。

2. 立地と環境

宮ノ口古墳群は京田辺市宮津白山に所在する。扇状地にわずかに突き出した尾根の南側斜面、標高55m付近に分布する。現在、この斜面は麓に設けられた公園のために大きく削り取られて急な崖となっているが、明治時代に作成された正式2万分の1地形図では南方を流れる川に向かって斜面がつづく様子がみられる。

古墳群の南東側には白山神社があり、さらに東方には宮ノ口の集落と水田が広がる。白山神社は1883年（明治16）作成の『綴喜郡神社明細帳』では創建年月不詳で1873年（明治6）中に村社格に宛てられたとされ、境内図からは現在とおおむね同じ様子であることがうかがわれる。国の重要文化財である本殿は享禄5年（1532）建立で、慶長4年（1599）の棟札が残る。境内の石灯籠は永享5年（1433）の銘をもち、かつて白山神社の神宮寺として存在した法雲寺のものと伝わる。また、宮ノ口の集落は大阪府枚方市との境界付近の山腹に所在する朱智神社に至る参道の入り口にあり、「宮ノ口」という地名もそのことに由来するとされる（田辺町郷土史会編1968）。

周辺の遺跡のうち、横穴式石室を有する古墳は宮ノ口古墳群の北方には下司古墳群および大御堂裏山古墳、山崎2号墳、菖蒲谷古墳、南方には平谷4号墳がある。

下司古墳群や大御堂裏山古墳は普賢寺谷の北側斜面にある。1983年の発掘調査では、副葬品である土器にくわえて鍔座金具などが出土しており、7世紀代に築造されたとみられている（同志社大学校地学術調査委員会編1985）。この普賢寺谷の一筋南側には遠藤川とそれによって形成された谷地形が伸びる。遠藤川下流、現在三山木と呼ばれる地域の丘陵上には山崎古墳群がある。このうち山崎神社境内にある2号墳（八王子塚）は横穴式石室を有し、その内部か

らは耳環や須恵器高杯が出土している（梅原 1923）。現在、神社境内には石室の天井石が露出しており、出土品の耳環は、山崎神社所蔵の石棒とともに京田辺市指定文化財となっている。

山崎古墳群から遠藤川の北岸をさかのぼると菖蒲谷古墳がある。1957 年の田辺町郷土史会による調査では全長 11 m、幅 2 m で南へ開口する横穴式石室墳とされており（村田編 1959）、現在でも石室石材の一部を確認できる。なお、遠藤川南側の尾根上には後期古墳とされる宮津古墳および江津古墳が所在するが（村田編 1959、田辺町教育委員会 1982）、調査が実施されておらず詳細は明らかでない。この尾根を越えると宮ノ口古墳群の位置する谷筋となる。

宮ノ口古墳群の南方には、煤谷川沿いの尾根上から南側斜面にかけて平谷古墳群が展開する。このうち 4 号墳は残存長 1.2 m、幅 0.8 m の小規模な横穴式石室が露出しており、その石室の形状から 7 世紀前半代の築造と推定される（奥村 1990）。

また、宮ノ口古墳群東方の平地部は、古代になると山陽・山陰道の通る地域となる。山崎古墳群の東方には山本駅が比定され、その時代の遺跡として三山木遺跡や二又遺跡が所在する。このほか、宮ノ口古墳群東方の平地部にある宮ノ口遺跡では古墳時代前期の井戸や鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡などが検出されている（京都府文化博物館 1993・1996）。

3. 既往の調査と報告

（1）古墳群の分布

白山神社裏手の丘陵に古墳が存在することは比較的古くから知られていたようで、『田辺町郷土史古代篇』（村田編 1958）や『田辺町史』（田辺町郷土史会編 1968）には「宮ノ口古墳」の存在が記される。1973 年には白山神社西側の斜面を掘削中に石材が露出し、京都府教育委員会が横穴式石室（宮ノ口 2 号墳）であることを確認している（田辺町教育委員会 1995）。1980 年代の遺跡地図等では 3 基の古墳群として記載されている（京都府教育委員会 1985、田辺町教育委員会 1982）。その後、後述のように宮ノ口 4 号墳が発見、発掘されており、現在の遺跡地図では西から東へ 1、2、4、3 号墳の順に並んで分布すると表示されている¹⁾。

（2）4 号墳の発掘調査

4 号墳は崖法面の工事の際に、須恵器高杯などが発見されたことで存在が確認され、田辺町教育委員会により国庫補助事業として発掘調査が実施された（田辺町教育委員会 1995）。

調査の結果、墳丘構築のために造成された平坦面とそれを丘陵から切り離すための周溝、さらに横穴式石室の掘方と壁体の一部が確認された。周溝から墳丘は径 6～7 m の円墳とみられる。石室の掘方は幅約 2.9 m で、石室は奥壁の下半部を中心にわずかながら残存していた。石室の奥壁幅は 1.3～1.4 m で、南南東へ開口していたと考えられる（図 2）。

遺物は表土付近と墳丘周囲の堆積土、石室内から遺物が出土している。その多くは白山神社に関係すると考えられる土師皿である。古墳にともなう土器については後述する。また、周溝埋土などから土師質亀甲形陶棺が出土している（図 3）。出土したのは棺身の口縁部や底の立ち上がり部で、後者は分割面と脚部の接合面が残る。出土状況から 4 号墳ではなく別の古墳にともなうものと考えられている。

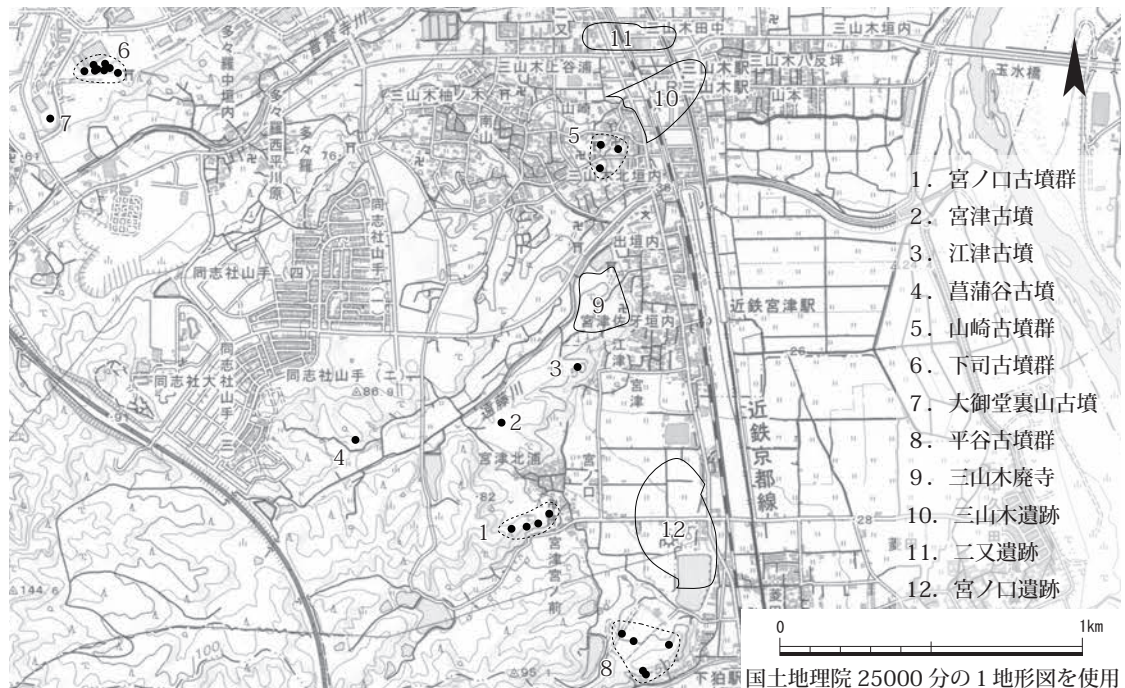


図1 宮ノ口古墳群の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)

(3) 2号墳の発掘調査

2号墳は4号墳調査時に実施された測量調査で残存が確認され、破壊の可能性が高いことから発掘調査がおこなわれた(田辺町教育委員会 1996)。既往の報告によるとトレンチの北側および東側で墳丘を切り離す溝が検出され、墳丘は径約18mの円墳に復元されている。また、幅約4m、深さ約2.5mの石室掘方と原位置をとどめる石室石材2点が確認されている。遺物については、表土直下より陶棺片、攪乱土中より須恵器蓋杯・高杯、床面に近い層から須恵器破片および鉄器、床面からは須恵器杯身、瓦器、鉄器が出土したと報告されている。

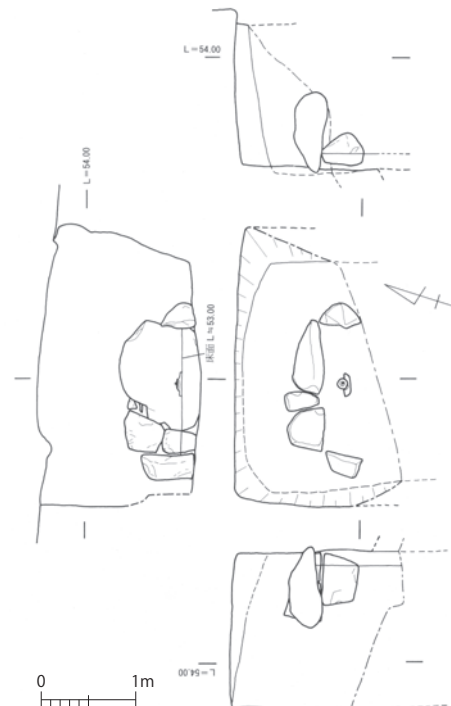


図2 4号墳横穴式石室 (S=1/80、田辺町教育委員会 1995 を一部改)

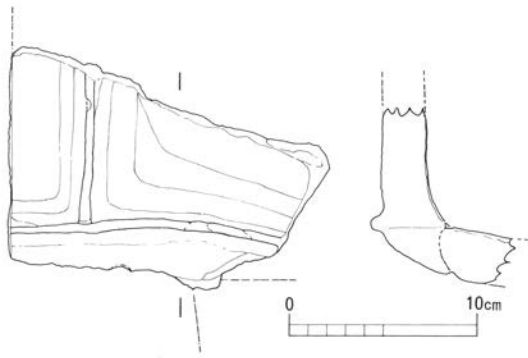


図3 4号墳出土陶棺 (S=1/4、田辺町教育委員会 1995)



写真1 4号墳石室残存部 (南から)

4. 2号墳検出遺構の再検討

(1) 墳丘と周溝

調査区北側で地山が断面逆台形状に掘り込まれた様子が確認されている (図5・写真2)。溝の底部は幅約1 mで、最深部の標高が56.6 m前後、深さは残存する範囲で約70 cmである。墳丘側は緩やかに地山が立ち上がっていく様子はみられるものの、墳丘の大半は石室に向かって播鉢状に削平されているため明確な盛土は検出されていない。調査区東側では蛇行する溝が検出されており、既往の報告では周溝の延長に当たると判断している。ただし、その場合に復元される墳丘は石室掘方の中軸からやや東に寄り、東裾が4号墳の墳裾にかなり接近することとなる。東側の溝が蛇行する点からも、この溝の積極的な評価を避けて、一回り小さい墳丘を想定してもよいかもしれない。

(2) 石室掘方

石室掘方 墳丘内側では石室構築のために地山を掘り込んだ様子が確認された。この掘方は残存している範囲で幅約4 m、約3 m、深さ約1.5 mをはかる。掘方内の埋土 (図5-27層以下) は石室築造後の堆積土と考えられる。遺物のほとんどはこの堆積土中から出土しているようである。遺物の注記や既往の報告から、掘方内には石材抜き取り穴を中心に、石室埋没後の攪乱が多くあったようで、石室の破壊と埋没が繰り返された様子を想定できる (写真3)。

石室石材 掘方内の西よりでは長径60 cm前後の石材2点が南北に並ぶように検出された。原位置をとどめる石室石材と考えられる。堆積土中より出土した石材10点程度も同様の形状、大きさであることから、本来は石室を構成していたものであろう (図6、写真3・4)。

石室構造 掘方と石材の状況から主体部は横穴式石室と考えてよいだろう。石室の規模は定かでないが、原位置をとどめる石材2点が右側壁基底部をなし、掘方と石室の中軸線が一致すると想定するのであれば石室幅は約1.5 mに復元でき、石材抜き取り痕跡との位置関係とも矛盾しない。なお、想定される中軸線と石室開口方向が一致するとすれば、石室は南から西へ約10度の方向へ開口していたと考えることができる。

床面と再利用面 既往の報告でも言及されているように、遺物は攪乱土中以外に床面付近の層と床面上で出土しており、調査当時の資料からも床面とその上層で少なくとも2度の掘削停止

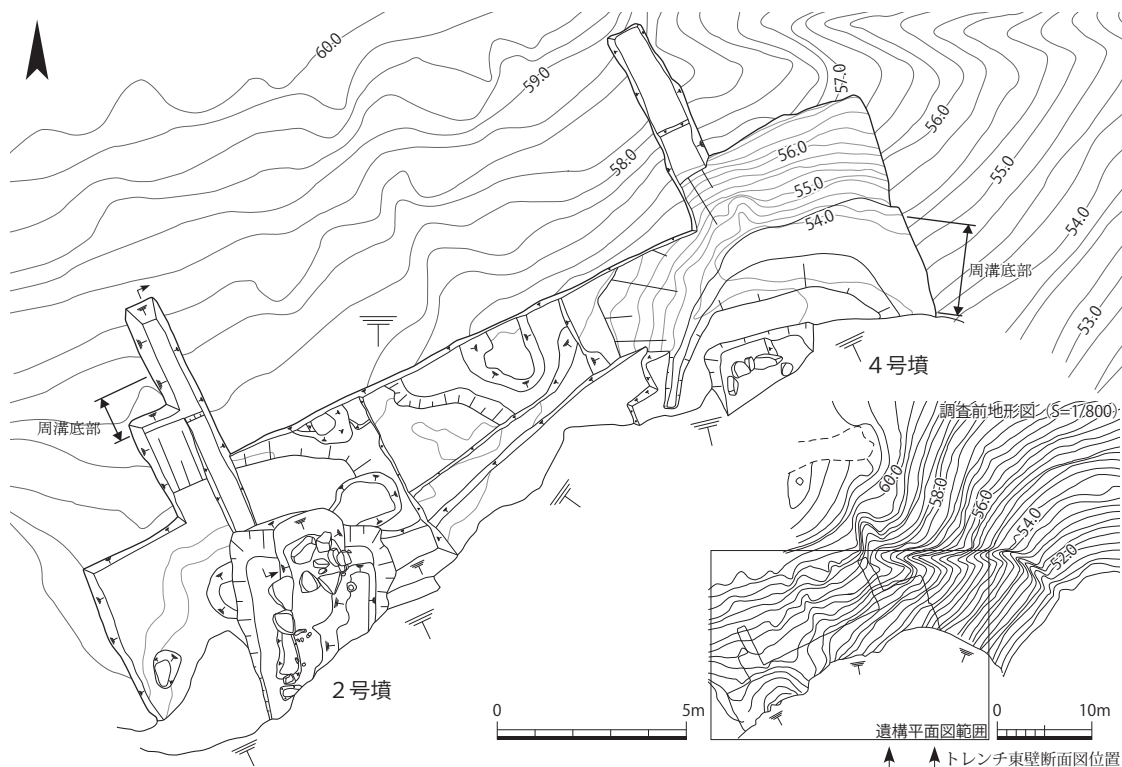


図4 調査区平面図 (S=1/200)

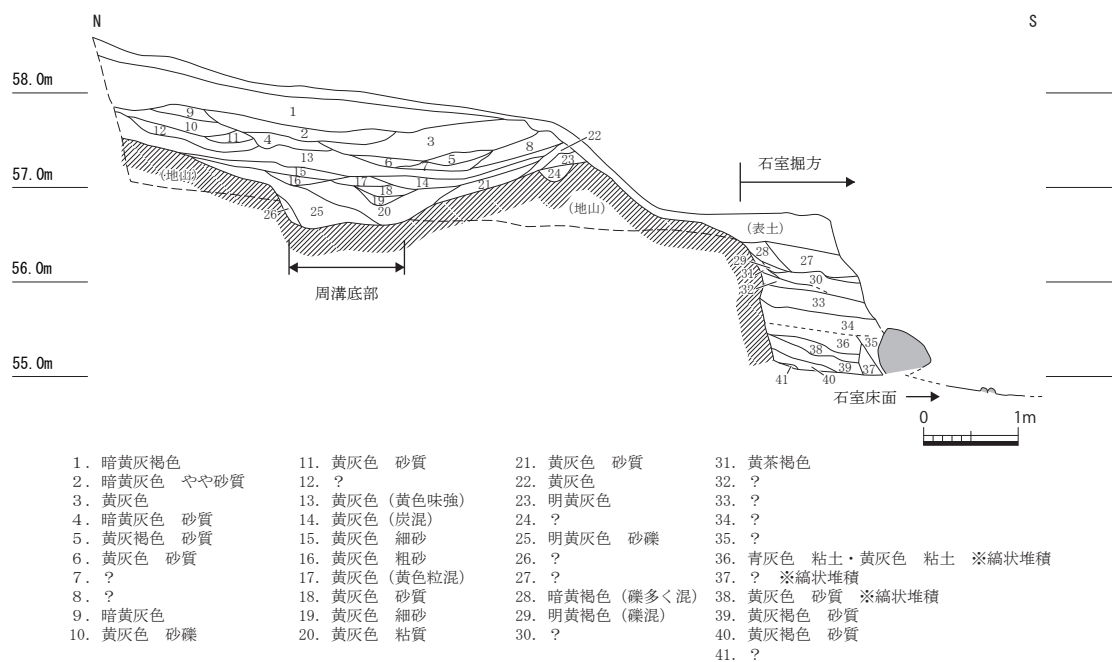


図5 2号墳土層断面図 (S=1/80)

面があったことがうかがわれる。この状況から石室床面とさらに上層の利用面を複数想定できる。以下では石室の遺物の出土位置や各図面の情報を総合して石室の利用面について検討を試みる。

遺物の出土地点や層位については完全ではないものの注記や遺構図面などからおおまかに把握することができる。注記にみられる出土位置には「攪乱」、「抜き取り」、「床面」、「掘りかた」

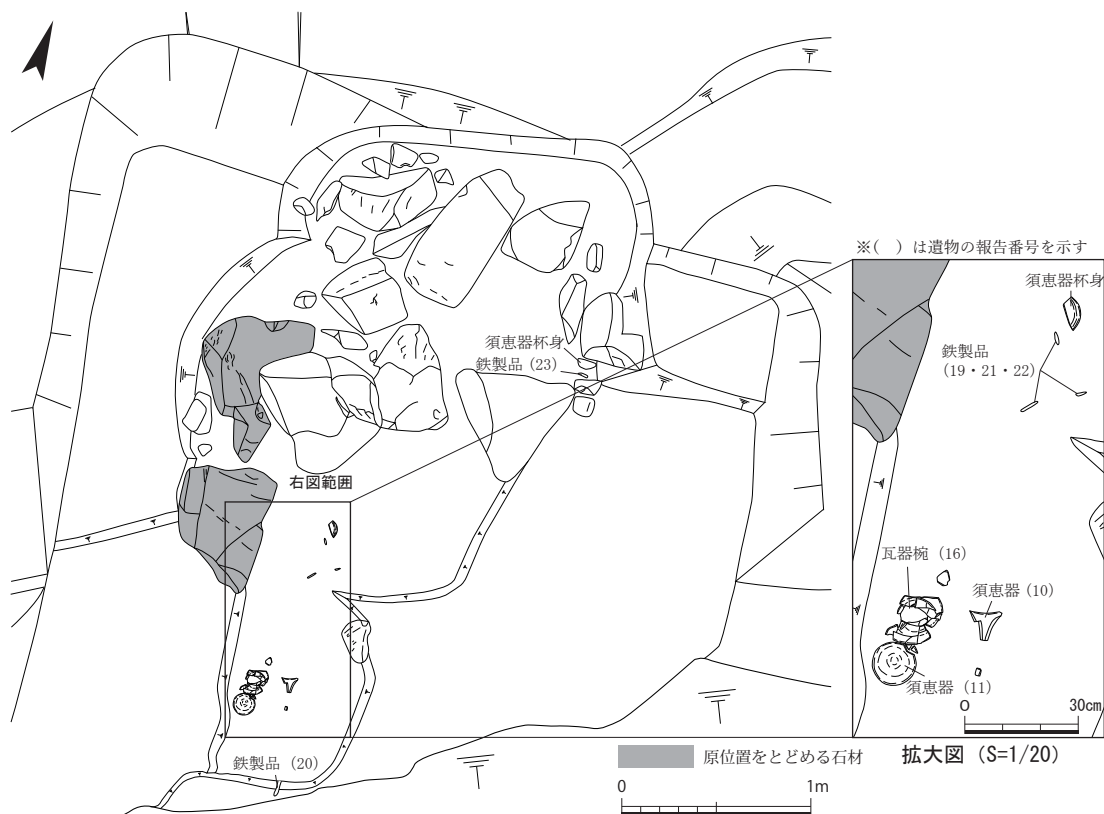


図6 掘方内平面図および遺物出土状況平面図 (S=1/40)

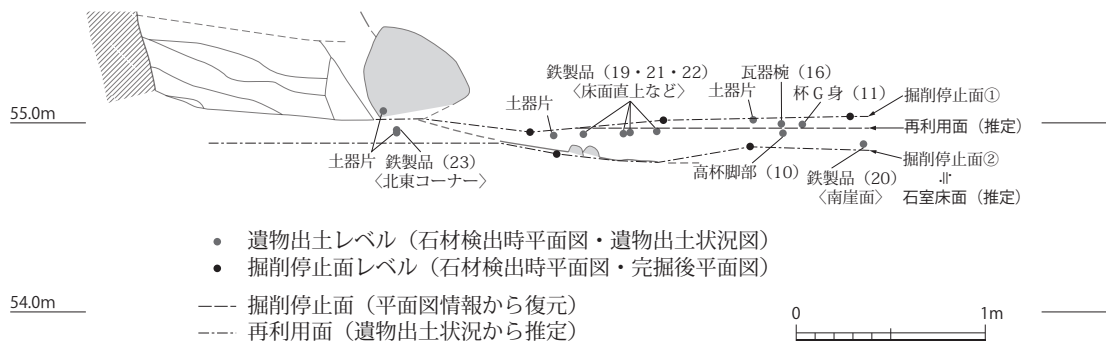


図7 遺物の出土レベルと石室利用面の復元 (S=1/400)

などがある。「攪乱」や「抜き取り」は後世の石室内堆積土に掘り込まれた攪乱や石材抜き取りのための土坑を指し、「床面」は石室床面上やその直上層にあたるとみられる。一部の遺物は「掘りかた埋土」から出土したと記録されているが、出土日が掘方内の上層を掘削している頃の早い日付であることや「攪乱」内出土の破片と接合することから、裏込め土などの石室構築時の埋土にともなうものとみるよりは掘方内の後世の堆積土中の出土と考えたい。遺物の大半は攪乱あるいは石材抜き取り穴の埋土からの出土である。一方、石室床面上層では右側壁に沿って須恵器杯Gと瓦器碗が並ぶ状態で出土している(写真5)。この2点と周辺で土器片が検出された時点での出土状況図が作成されている。調査ではそれらの遺物の取り上げ後にさらに掘削が進められたとみられ、断面図には掘り下げ後の面が記録されている。出土状況図の作成時点での掘削停止面は標高がそろわず、杯Gや瓦器碗以外の遺物はそれらよりも少し低



写真2 トレンチ東壁、周溝（南西から）



写真3 石室内攪乱検出状況（北西から）



写真4 掘方内攪乱掘り下げ時（西から）



写真5 遺物出土状況（西から）

い位置で検出されている。断面図に整理すると、杯G・瓦器碗の出土レベルと最終的な掘削停止面までの間に遺物が一定量存在することになる（図7）。このことから礫などの床面構造は検出されていないものの、最終的な掘削停止面が石室床面にほぼ対応し、その埋没後、杯Gと瓦器碗が並ぶ標高 55.0 m 付近にさらに利用面（以下、再利用面）が存在したと考えたい。

5. 2・4号墳出土遺物

（1）遺物出土状況

2号墳の出土遺物は、表土直下、掘方内の攪乱（石材抜き取り穴）埋土、再利用面および底面直上層のおおむね3種類の出土地点に分けられる。このうち表土直下は上方からの流入土とみられ、ここから出土した土師皿と土師質陶棺片（写真6）は2号墳にともなうものではないと考えられる。既往の報告、注記、出土年月日からみて流入土の層と掘方内攪乱埋土は明確に区分され、後者はかなり掘方底面や再利用面に近いようであり、攪乱埋土出土遺物が2号墳にともなう可能性は高いだろう。再利用面では須恵器杯身（図8－11）と瓦器碗（図8－16）が並ぶように出土している。出土状況からみて原位置に近い可能性がある。再利用面下層、すなわち掘方底面の直上層からは土器や鉄製品が出土している。土器については特定が難しいが少なくとも須恵器高杯脚部（図8－10）はこの層からの出土である。鉄製品（図9－19～23）については注記内容から出土状況図とおおむね対応させることが可能である。1は掘方北東部、2～4は掘方中央部にまとまって、5は調査区南端部で出土している。再利用面下層であることからこれらが2号墳の埋葬にともなう可能性は非常に高い。



写真6 2号墳出土陶棺

4号墳では、須恵器杯蓋（図8－17）が床面上の棒状を呈する石の上ののった状態で出土した。須恵器高杯（図8－18）は崖法面の工事にともない古墳の存在が確認された際に採集されたもので崖面から転落してきたと思われる。

（2）土器

以下では、2号墳にともなう可能性が高い土器のうち、残存率が高く、口径（底径）を

復元できたものを報告する。なお、図化しえなかったが壺の口縁部や頸部と思われる破片も出土している。また、2号墳出土土器との比較検討のために4号墳にともなう可能性の高い須恵器2点について改めて実測をおこない報告をおこなう。

2号墳出土土器（図8－1～16） 1・2は杯蓋である。いずれも天井部を欠く。残存部においては内外面ともに回転ナデをほどこす。明確な稜はみられないものの緩くカーブを描いて屈曲する肩部をもち、肩部から口縁部にかけては強いナデにより内湾する。いずれも口径は12cm前後、口縁部から肩部までの立ち上がりは1cm程度で似通う。

3～8、11は杯身である。3～6は受け部をもつ。3はそのなかで最も小さい個体である。底部外面はヘラキリ未調整であるが、ロクロからの切り離しにともなう明瞭な段は認められない。立ち上がり部がやや内傾し、受け部は断面U字を呈するようにやや上方に開き、端部に向かって薄くシャープに仕上げられている。4の底部外面にはヘラケズリがほどこされる。立ち上がり部は強い回転ナデによりくの字状に内側に折れて内傾する。受け部が短くほぼ水平に突出し、立ち上がり部との境に凹線がめぐる。立ち上がり部、受け部とともに肥厚する。5の底部外面はヘラキリ未調整で、板状の工具を押し当てたような直線状の痕跡が残る。他の杯身に比べて、立ち上がり部、受け部ともに突出は短く、全体的に厚みがある。6はこれらの中で最も径が大きい。底部調整は欠損により不明である。体部外面には線刻のような痕跡が2本確認される。底部が残存しないため確証を得ないが、ヘラで脚部透かし孔を切り込む際についた痕跡とも考えられ、径が大きい点も合わせて有蓋高杯の杯部である可能性がある。

7・8は無蓋高杯の杯部である。7は残存率が低く不確実ではあるが、やや大きな径に復元される。外面には沈線などの加飾は認められない。8は外面に2条の沈線がめぐる。

9・10は高杯脚部である。9は3方向、長方形の透かし孔をもち、透かし孔の下端と上方に2条の沈線がみられる。10は透かし孔の数は残存状況が悪く確証を得ないものの、残存する2つの透かし孔の間隔がやや広いことから3方向と想定しておく。沈線は透かし孔下端に2条、上方に1条を確認できる。9・10のいずれも残存部を観察する限りでは透かし孔は上方の沈線をきるようであり、沈線の位置からみて2段と考えるのが妥当であろう。

11は受け部をもたない杯身（杯G）である。後述する瓦器碗と並ぶ状態で、ほぼ完形で出土した。底部外面はヘラキリ未調整で口径11.5cmをはかる。

12はつまみをもつ蓋である。内外面とも回転ナデをほどこし、口縁端部は丸くおさめる。全体としては丸みを帯び、半球に近い形に仕上げられている。つまみはボタン状で頂部にくぼ

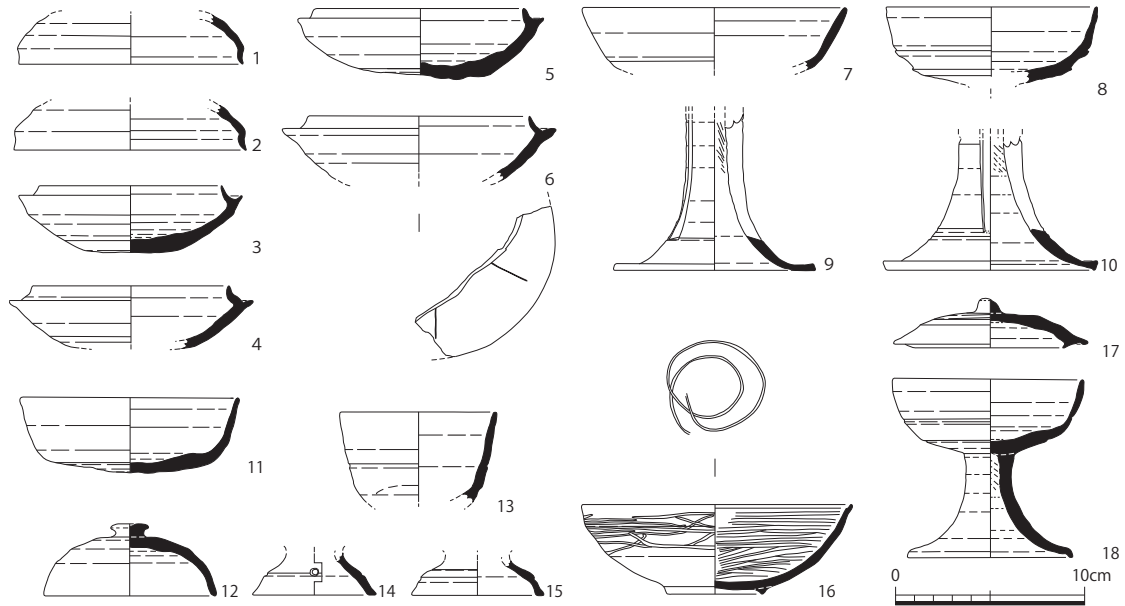


図8 2・4号墳出土土器実測図 (S=1/4)

表1 出土土器観察表

報告 番号	注記		種類	器種	法量 (cm)			残存率	色調		胎土	焼成	技法上の特徴	備考
	取上年月日	出土位置			口径	底径	器高		外面	内面				
2号墳出土遺物														
1	960219	石室攪乱土東部	須恵器	杯蓋	11.7 (推定)	—	2.6 (残存)	6分の1	緑灰	青灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	
2	960229	石室攪乱土北部	須恵器	杯蓋	12.1 (推定)	—	2.3 (残存)	12分の1	暗青灰	青灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	
3	960221	石材抜き取り あと中央部	須恵器	杯H身	9.6 (推定)	—	3.5 (残存)	12分の5	青灰	青灰	密(Φ0.1~1.0mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	底部外面:ヘラキ リ未調整	
4	960223	石室攪乱土北部	須恵器	椀か	10.0前後 (推定)	—	4.7 (残存)	6分の1	暗紫灰	暗青灰	密(Φ0.5~1.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	底部外面:回転ヘ ラケズリ、ロクロ 回転方向:右	
5	960307	石室内攪乱 北端部	須恵器	杯H身	10.3 (推定)	—	3.3 (残存)	6分の1	明オリーブ灰	オリーブ灰	密(Φ0.1~1.0mm の白色砂粒をわず かに含む)	良好	底部外面:回転ヘ ラケズリ、ロクロ 回転方向:右	
6	960130	掘りかた埋土	須恵器	杯H身	11 (推定)	—	3.3	12分の7	青灰	青灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	底部外面:ヘラキ リ未調整	底部に板具痕あり
	960228	かぐらん土 (北部石室外)												
7	960130	掘りかた埋土	須恵器	杯H身	11.6 (推定)	—	3.9 (残存)	4分の1	青灰	暗青灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒を少量 含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	底部に線刻状の痕 跡あり
8	960214	攪乱土南端崖面	須恵器	無蓋高杯身	14.0 (推定)	—	3.3 (残存)	6分の1	青灰	青灰	密(Φ1.0~3.0mm の白色砂粒を少量 含む)	堅緻	底部外面:回転ヘ ラケズリ	
9	960306	石室内攪乱 中央部	須恵器	無蓋高杯身	11.2 (推定)	—	4.0 (残存)	6分の1	青灰	青灰	密(Φ0.5~2.0mm の白色砂粒を少量 含む)	堅緻	底部外面:回転ヘ ラケズリ、ロクロ 回転方向:右	
10	960130	掘りかた埋土	須恵器	高杯脚部	—	10.7 (推定)	8.3 (残存)	3分の1	青灰	青灰	密(Φ0.5~3.0mm の白色砂粒を少量 含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	透かし孔:3方 向、脚部内面に絞 り痕あり
11	960311	—	須恵器	高杯脚部	—	11.0 (推定)	7.0 (残存)	4分の1	暗オリーブ灰	緑灰	密(Φ0.5~3.0mm の白色砂粒を少量 含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	透かし孔:3方 向、脚部内面に絞 り痕あり、外面に 自然釉がかかる
12	960311	—	須恵器	杯G身	11.5	—	4.0	完形	青灰	青灰	密(Φ0.1~4.0mm の白色砂粒を少量 含む)	堅緻	底部外面:ヘラキ リ未調整、ロクロ 回転方向:右	
13	960223	石室攪乱土北部	須恵器	壺蓋	9.0 (推定)	—	3.8 (残存)	12分の5	青灰	明青灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	
14	960214	攪乱土北東 コーナー	須恵器	短脚高杯脚部	—	5.8 (推定)	2.2 (残存)	4分の1	青灰	青灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	良好	内外面:回転ナデ	円形の穿孔をほと こす
15	951225	かぐらん土	須恵器	短脚高杯脚部	—	7.0 (推定)	1.8 (残存)	12分の1	暗紫灰	暗青灰	密(Φ0.5~1.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	内外面:回転ナデ	
16	960311	—	瓦器	椀	11.3	5.0	4.8	完形	暗青灰	青灰	密	良好	ナデのちヘラミガ キ	
4号墳出土遺物														
17	940922	—	須恵器	杯蓋	7.8	—	2.6	完形	緑灰	明オリーブ灰	密(Φ1.0~3.0mm の白色砂粒・黒色 砂粒を少量含む)	良好	天井部外面:回転 ヘラケズリ	
18	930813	—	須恵器	無蓋高杯	11.0	8.8	9.5	完形	明緑灰	明緑灰	密(Φ0.1~0.5mm の白色砂粒をわず かに含む)	堅緻	身下半外面:回転 ヘラケズリ	脚部内面に絞り痕 あり

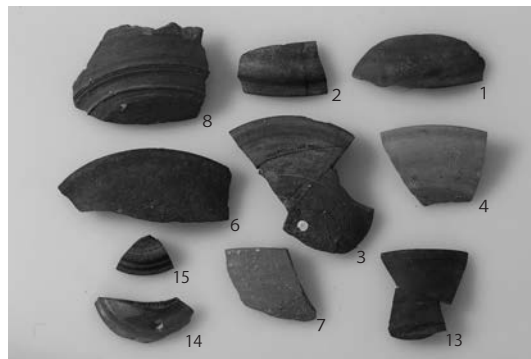


写真7 2・4号墳出土土器

みをもつ。口径が小さいことから壺にともなうものと考えるのが妥当であろう。壺とみられる破片が出土していることとも合致する。

13は口縁部の破片である。外面には回転ナデと回転ヘラケズリ、内面には回転ナデをほどこす。体部半ばに沈線がめぐる。その下方のナデとケズリの境界線付近には全周せずに途切れる凹線がみられる。残存率が低く、ひずみがあるため正確な復元は難しいが、口径は10cm前後と推定される。こうした特徴から、椀のような口径が小さく、やや深さのある器形が想定できる。

14・15は脚部である。14は底部に向かって直線的に開いていく形状で、外面半ばに1条の沈線と円形の透かし孔が施されている。15は半ばがやや外側に膨らむ形状を呈し、外面には2条の沈線がめぐる。これらはいずれも残存高が2cmに満たない短いものであり、13のような小型の椀や杯にともなう脚部であったと考えられる。

16は瓦器碗である。口縁部はナデによりやや外反し、口縁内端部に段をつけるように沈線がほどこされる。外面はナデ成形ののち体部上半に分割ヘラミガキが、内面は口縁部付近から半ば近くまで圈線ヘラミガキがほどこされ、見込みには暗文がみとめられる。底部には断面三角形の低い高台を付す。

4号墳出土土器（図8－17・18） 17は杯蓋である。強く内傾する短いかえりを有し、受け部には凹線がめぐる。天井部外面には回転ヘラ削りをほどこし、頂部には乳頭状の小さなつまみを付す。18は無蓋高杯である。杯部外面には2条の浅い沈線がめぐる。脚部は無透かしで、内面には絞り痕がみられる。

宮ノ口古墳群出土土器の検討 以上の出土土器から宮ノ口2・4号墳の時期を考えてみたい。なお、本稿で使用する須恵器編年は、6世紀については田辺昭三氏による陶邑古窯跡群出土資料を基にした編年（田辺 1966・1981）を、7世紀、TK209 型式併行期以降の須恵器については西弘海氏以来の飛鳥・藤原宮地域出土資料を基にした編年（西 1978、西口 1999、深澤 2002、菱田 2011）を用いる。瓦器碗については森島康雄氏による地域型と編年の整理（森島 1995）を参考とした。

まず、2号墳出土土器のうち蓋杯は蓋の復元口径が12cm前後、身も有蓋高杯杯部の可能性があるものを除けば受け部径は11～12cm程度で法量に差はみとめられない。身については立ち上がりの高さや内傾は大きく異なるものの、底部調整にはヘラケズリをほどこすものとヘラキリ未調整のものが混在する。杯Gが口径11.5cmでヘラキリ未調整であることと合わせて、おおむね飛鳥Ⅰ新段階と位置づけられる。ただし、高杯脚部は2段3方向、長方形の透かし孔をもつという点ではTK43～TK209 型式併行期という幅のある時期を想定できる。また、短脚の脚部については鈴千夏氏が横穴式石室出土の低脚高杯の分類と編年をおこない、脚部形態は6世紀後半以降に底部に段を有し、端部は面をもってまとまるものや脚部の高さの中ほどで段をもち垂直に近い形で端部がおりるものがみられるようになり、透かしは7世紀前半以降、円形などの小さなものや透かしのないものが増えると指摘している（鈴 2015）。2号墳出土の脚部もおおむね同様の傾向を示している。なお、瓦器碗については口縁部の形態から大和型に分類され、ヘラミガキの省略化傾向や法量から第Ⅲ段階A型式に該当する。

次に、4号墳出土遺物のうち、杯蓋は受け部9.5cm程度でつまみも退化の進んだ形状であることから飛鳥Ⅱの時期を想定したい。無蓋高杯が透かし孔をもたず、比較的low脚なものである点もこれと矛盾しないだろう。

以上のことから、土器からは2号墳はおおむね7世紀前葉、4号墳は7世紀中葉に位置づけられ、2号墳に関しては12世紀後半の再利用を想定することができる。（岡田大雄）

（3）鉄製品（図9、写真8）

宮ノ口2号墳からは複数の鉄製品及びその破片が出土している。いずれも破片資料であり、今回の報告では図化しえた6点について報告する。なお、これらの鉄製品はすべて保存処理

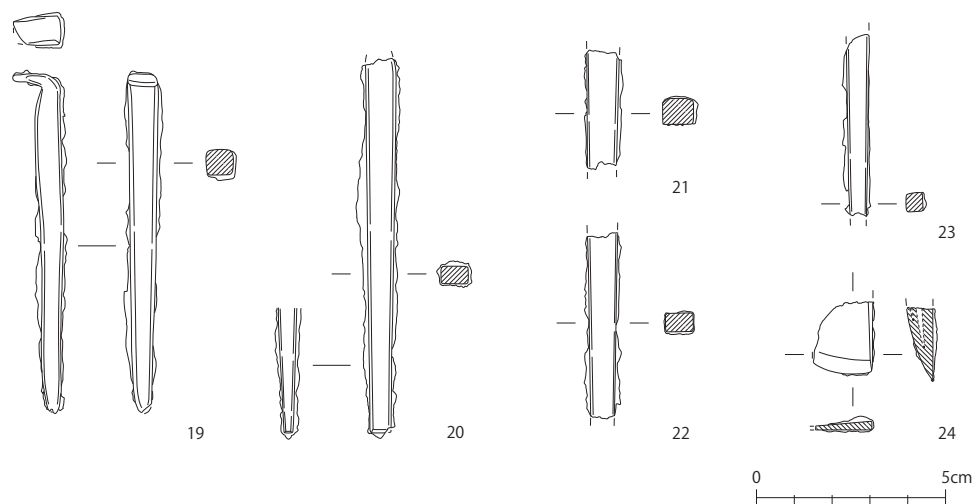


図9 2号墳出土鉄製品実測図 (S=1/2)



写真8 2号墳出土鉄製品

がおこなわれており、現状では木質を確認することが困難となっている。

鉄釘 4点確認されている。いずれも横穴式石室の床面及び床面直上層から出土している。

19は残存長9.1cm、頭部幅0.7cm、身部幅0.7cm、厚さ0.7cm、重量12gをはかる。身部の断面形は正方形で頭部の断面形は長方形に近い。頭部は鍛打し折り曲げてつくる。先端は四角錐状になっている。「床面直上層」から出土している。20は残存長10.0cm、

身部幅は上部が0.8cm、下部が0.6cm、厚さは上部が0.6cm、下部が0.4cm、重量17gをはかる。頭部は欠損している。身部の断面形は長方形である。「南崖面」からの出土である。21は残存長3.1cm、身部幅0.8cm、厚さ0.7cm、重量5gをはかる。頭部および端部は欠損している。断面形は長方形である。「床面直上」から出土している。22は残存長4.9cm、身部幅0.7cm、厚さ0.5cm、重量6gをはかる。頭部および端部は欠損している。断面形は長方形である。前述した3とは形状が類似しているため同一の個体の可能性もある。「石室床面」から出土している。

以上の鉄釘4点は出土状況から古墳に伴うものであると考えられる。19～22はいずれも全長10cmと推定され、金田善敬氏の鉄釘分類の小型品Ⅲ類に相当する(金田2003)。石室内から出土していることや木棺に使用される鉄釘として大きさも十分であることから、19～22については木棺に伴うものとみてよいだろう。京田辺市域では宮ノ口古墳群と前後する時期の下司古墳群や堀切古墳群からも鉄釘の出土が知られ、これらも同様の大きさのことが多い。

不明鉄製品 いずれも攪乱からの出土であり帰属時期を限定することは難しい。23は棒状鉄製品で残存長4.7cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重量5gをはかる。鉄釘の可能性もあるが19～22に比べると細い。断面形は正方形に近い。「攪乱埋土北東コーナー」から出土している。

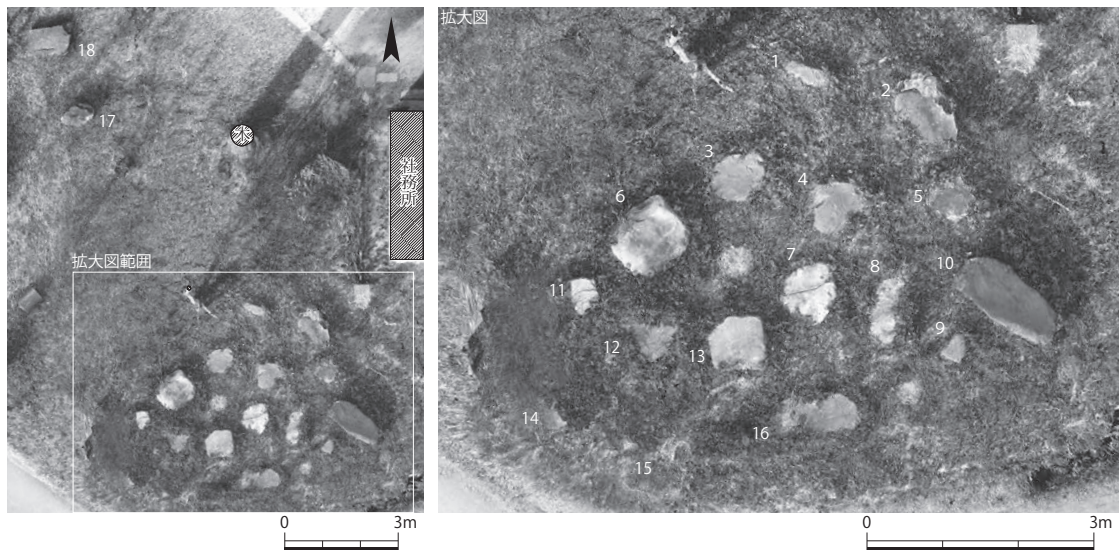


図10 石材の分布状況オルソ図（左：S=1/200、右 S=1/100）

表2 石材観察表

No.	岩石名	備考	No.	岩石名	備考	No.	岩石名	備考
1	ホルンフェルス	泥質	7	花崗岩	黒雲母	13	ホルンフェルス	泥質
2	花崗岩	黒雲母、細粒	8	珪岩	原岩はチャート	14	花崗岩	細粒
3	ホルンフェルス	泥質	9	ホルンフェルス	泥質	15	花崗岩	黒雲母、細粒
4	ホルンフェルス	泥質	10	花崗岩	黒雲母、細粒	16	ホルンフェルス	泥質
5	花崗閃緑岩		11	花崗岩	細粒	17	ホルンフェルス	
6	花崗閃緑岩		12	ホルンフェルス	砂質	18	花崗岩	

24は刃部を持つ鉄製品の破片で、残存長2.0cm、刃部幅1.5cm、重量3gをはかる。錆化により正確な厚さは不明だが片刃の可能性がある。「攪乱土」からの出土である。（池田野々花）

6. 石室関連石材の調査

（1）石材の分布状況

白山神社と隣接する公園の境界付近には長径100cm前後の石材が16点集積されている（図10-1～16）。これらの石材は宮ノ口2・4号墳の発掘以前の土取りにともなって出土したものとされる²⁾。付近には同様の集積はみられず、周囲の大阪層群の砂層から自然にこれらの石材が転落する状況は想定しづらい。石材の原位置は不明であるが、石室構築材の可能性が考えられるため調査を実施した。この集積よりさらに3mほど北方には2点の石材があり（図10-17・18）、集積された石材と同じ性格のものは不明であるが、神社境内の石材とも異なるため調査対象としている。なお、白山神社境内にも加工の少ない石材が点在するが面の整形や刻銘がみられ、現在も神社の空間を構成するものとして利用されているという点で集積石材とは異なるため、今回は調査の対象外としている。

（2）石材の特徴

石材の長径は最大で約150cm、最小でも約50cmで、いずれも扁平で広い面を上にして置かれている。岩石名は表2の通りである。石材の分析は、橋本清一氏の肉眼鑑定による。石材の種類はおおむねホルンフェルスと花崗岩（黒雲母もしくは花崗閃緑岩）である。石材の大き

さ、種類ともにそろい、形状も石室に適していることから石室構築石材とみなすことは妥当であろう。石材は木津川支流河川の河床礫が多い。その採取地については京田辺市域西部の地質調査をおこなえていないため、推測の域を出ないものの、木津川東岸の城陽市と井手町の境界付近を流れる玉川あるいは南谷川である可能性が高い。

7. おわりに

以上、宮ノ口古墳群について2・4号墳の発掘調査成果をもとに再整理をおこなった。2号墳については出土土器から7世紀前葉の時期が想定され、12世紀後半の再利用時あるいはそれ以前に副葬品の多くは持ち出されたとみられる。玄室幅が1.5 m程度の横穴式石室を有する円墳と考えられ、鉄釘の出土から釘付木棺が存在した可能性が高い。4号墳については幅1.1 m程度の横穴式石室の奥壁下半部が検出されており、出土土器からは2号墳よりやや後出する7世紀中葉という時期が考えられる。いずれの発掘でも流入土より同一個体とみられる土師質陶棺が出土しており、上方に陶棺を埋葬するさらなる古墳の存在が予想される。また、古墳群に由来する石材は木津川東岸の南谷川あるいは玉川から搬入された可能性がある。とくに2号墳は既往の報告では遺構図面や出土遺物に未報告のものが多く、鉄釘に関しては出土自体が報告されていないという状況であり、本稿をもってそれらを報告するとともに宮ノ口古墳群を評価するための資料を提示できたことは大きな成果である。

本稿の成果を踏まえると宮ノ口古墳群の一つの特徴として、4基前後で構成される小規模な群集墳ながらも釘付木棺と陶棺という2種類の棺が採用されていたという点が挙げられる。そこで、以下では宮ノ口古墳群あるいは宮ノ口古墳群が位置する旧綴喜郡西部（木津川左岸）の横穴式石室墳の評価の視点の一つとして棺構造の多様性に注目してみる。

群集墳における棺構造の多様性に関しては、笹栗拓氏が淀川流域を中心とした畿内北部における鉄釘出土古墳の検討から、6世紀後半以降に釘付木棺が受容され、鉄釘の出土頻度は古墳群や小地域ごとに差があることを指摘している（笹栗 2014）。また、笹栗氏は棺構造に表出されるように古墳群ごとにモザイク状に個性や小地域性がみられるとする。

図11には本稿の成果を踏まえて、旧綴喜郡西部の横穴系埋葬施設と判明している棺構造を示した。旧綴喜郡西部は北側に大規模な横穴墓群が分布し、横穴式石室墳がみられないことが特徴として挙げられる。また、横穴墓の南限となる堀切古墳群では石室墳と横穴墓が混在している。釘付木棺の採用が想定される事例をみると、横穴系埋葬施設の導入自体が遅いこともありその出現は6世紀後半以降となる。特徴的であるのは、釘付木棺が全体的に採用されるとともに、多くの古墳（横穴墓）で石棺や陶棺が併用されることである。そして、この傾向は北部の大規模な横穴墓群から宮ノ口古墳群のような小規模な古墳群に至るまで、古墳群（横穴墓群）の立地や規模を問わずにみられる。こうした特徴は石室墳と横穴墓が混在することと合わせて綴喜郡西部の地域性あるいは墓室構造や棺構造のもつ意義を考えるうえで有効な視点となるのではないだろうか。本稿で掘り起こした宮ノ口古墳群の調査成果がそのための基礎資料として今後活用されることを願う。（岡田）

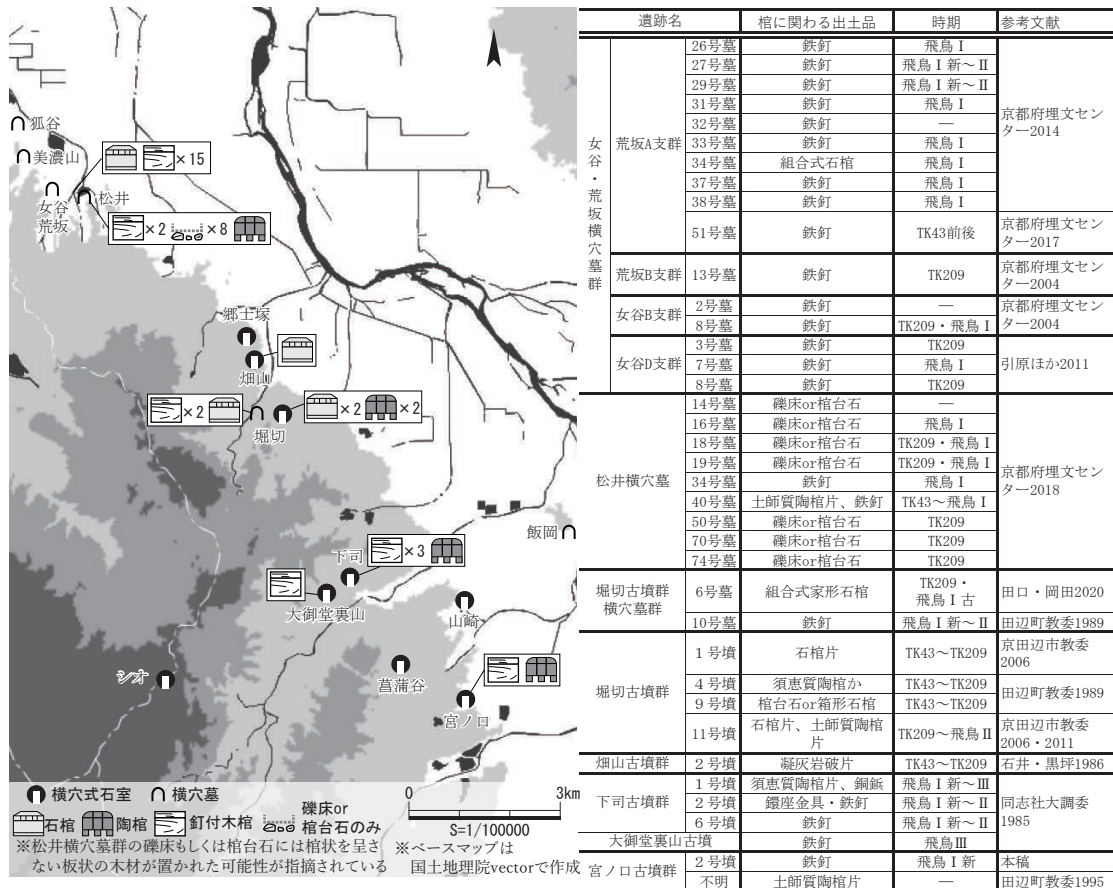


図 11 綴喜郡西部の横穴系埋葬施設と棺構造

註

- 1) 京都府・市町村共同統合型地理情報システム (<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp> 最終閲覧日: 2021 年 2 月 13 日)。なお、4 号墳については鷹野一太郎氏より既知の 1～3 号墳のいずれかであった可能性もあるとのご教示を得た。
- 2) 鷹野一太郎氏のご教示による。

参考文献

石井清司・黒坪一樹 1986「京奈バイパス関係遺跡昭和 60 年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 2 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター

梅原末治 1923 「三山木村山崎ノ石棒ト同地ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊 京都府

奥村清一郎 1990「南山城の後期古墳（4）」『京都考古』第55号 京都考古刊行会

金田善敬 2003 「古墳時代の鉄釘」『考古資料大観』小学館

京田辺市教育委員会 2006『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ―薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書一』（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第 36 集）

京田辺市教育委員会 2010 『京都府京田辺市 堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ―薪堀切谷・里ノ内地内宅地造成工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ―』（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第 37 集）

京都府教育委員会 1985『京都府遺跡地図』第5分冊〔第2版〕

京都府文化博物館 1993 『宮ノ口遺跡』 (京都府文化博物館調査研究報告第10集)

- 京都府文化博物館 1996 『宮ノ口遺跡―第2次発掘調査―』（京都府文化博物館調査研究報告第12集）
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 『女谷・荒坂横穴群』（京都府遺跡調査報告書第34冊）
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014 『京都府遺跡調査報告集』第157冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2017 『京都府遺跡調査報告集』第168冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018 『京都府遺跡調査報告集』第171冊
- 笹栗拓 2014 「北摂・三島における後・終末期の鉄釘出土古墳」『大阪文化財研究』第45号 大阪文化財センター
- 鈴木千夏 2015 「横穴式石室内出土の須恵器低脚高坏」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』18 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 田口裕貴・岡田大雄 2020 「京田辺市堀切古墳群の再検討（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号 京都府立大学文学部歴史学科
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 田辺町教育委員会 1982 『田辺町遺跡分布調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第3集）
- 田辺町教育委員会 1989 『堀切古墳群調査報告書』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集）
- 田辺町教育委員会 1995 『宮ノ口4号墳発掘調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第20集）
- 田辺町教育委員会 1996 『宮ノ口2号墳発掘調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第21集）
- 田辺町郷土史会編 1968 『京都府田辺町史』田辺町役場
- 同志社大学校地学術調査委員会編 1985 『下司古墳群―同志社大学田辺校地内所在遺跡の発掘調査報告―』（同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No.19）同志社大学校地学術調査委員会
- 西弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 西口壽生 1999 「飛鳥地域の再開発直前の土器」『奈良文化財研究所 年報』1999―Ⅱ 奈良国立文化財研究所
- 引原茂治・松尾史子・松元章徳 2011 「女谷・荒坂横穴群第11・12次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第142冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 菱田哲郎 2011 「後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学Ⅰ』（古墳時代史の枠組み）同成社
- 深澤芳樹 2002 「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』本文編 奈良文化財研究所
- 村田太平編 1959 『田辺町郷土史 古代篇』田辺郷土史会
- 村田和弘・松尾史子 2010 「女谷・荒坂横穴群第10・11次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第137冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森島康雄 1995 「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会